菊薫る命日に寄す

お父さん子どもたちは――あなたの背より高く育ちました

こんどの〝三池大災害十二周年抗議大集会〟（犠牲者にとっては十三回忌に当たる）には、遺族のなかには、遠く名古屋や近畿各県などからさえかけつけてきた人がいました。そんな人びとは、はたして何を考えたことでしょうか。次に、二つの手記を紹介します。

遺族　広沢睦子

「松竹さん、元気だったね」しっかり握り合う、手と手。あの人も、この人も、遠い処から御苦労様。何年振りに会う顔でしょうか。お互いの無事を喜び、いたわり合う抗議集会の遺族席でした。

亡き夫に、私は誓います。「お父さん（夫のことを、三池ではよくこう呼ぶ）、貴方が三井資本の保安無視で殺され、永久に黒枠の中に写真となって納まり、ものを言わなくなって十二年も経ちます。永い、苦しい日日でしたが、大爆発が昨日の事のような気もします。

やさしいお父さんを奪い取られた子供達も、大きく育ちました。三人とも貴方より背が高いんですよ。お父さんが生きていたら、きっと人に自慢することだったでしょう。

私は五十二歳。貴方よりも六年長生きしました。貴方の分まで長生きしなければならないから、うんと健康に注意しなければ……。

悪夢のようなあの日から、早や十二年間。苦しみの連続だった。様に扱った資本の責任を追及している裁判に、勝利しなければ…。

お父さんも、見守っていて下さいね」

×

広沢さんのお住まいは、「福岡市博多区西春町四丁目一八の二」です。お元気でがんばって下さるように。

遺族　片桐政子

菊薫る会場いっぱいを埋めつくした、組合員や主婦会員。

全国の仲間も、命を守る闘いへの連帯として、はるばる参加して下さった。

悪夢のようなあの日から、早や十二年間。苦しみの連続だった。憎んでも憎み切れない、三井鉱山。

始まるCO患者の手記の朗読。いまわしいあの日の坑底の模様がなまなましく思いだされて、涙がとまらない。

ほんとにつらい十二年間だったが、常に暖い皆様の支援でささえられたればこそ、力強く生きてこられた私たち。お父さん（夫のことを、三池ではこう呼ぶ）が、三池労組員としてがんばったことを、いまつくづく感謝するのである。

明るい展望がある、と藤本弁護士の裁判闘争経過報告も聞いた。

これまで三池の労働者は、いつも涙をのんで資本の支配に耐えてきたが、この裁判こそは必ず私たちの団結と全国の労働者の支援によって勝利しなければならない。

でも決して楽観を許されない裁判闘争。これからもよろしくお願い申し上げます。私たち家族も、いっそう元気をだして頑張り、裁判の勝利を目指し闘います。

×

片桐さんのお住まいは「兵庫県西宮市枝川町五番、浜甲子園団地三一号館三の一号室」です。

がんばりましょう。

三川鉱現場検証に思う

裁判長の目に、保安偽装がどう映ったことか

上は7日、大災害裁判の南新吾裁判長（向つて右の人）は、問題の三川鉱現場を検証した。下は、その日切実な思いを裁判長に訴える遺族やCO患者、その家族たち。

十一月七日、一一・九屈辱の日を目前にして、大爆発の事故現場である三川鉱大斜坑の検証が行なわれました。

同行した大眉法対部長は、報告しています。

検証には裁判所から南新吾裁判長以下事務官を含め七名。原告側より藤本、角銅、本多、小島の四弁護士に大眉、倉志三川指導部長が参加。被告側は五名の弁護士が参加し、本田保安監督官長と小林三川鉱副長が案内役を務めた。

現場検証では、とくに第一斜坑四目置付近の炭車脱線箇所に第八ベルトコンベヤー座と落口、炭車の転覆箇所などについて二時間にわたり調査したが現場は爆発当時のおもかげはなく、岩粉は真白に散布され、天井には水袋がぶら下がり、ベルト上の原炭も十分湿気を含み、「こうすれば炭じん爆発は防止できるのだ」ということを会社自ら証明していた。

原告側弁護団の追及に、会社側は爆発当時の状況説明には言葉をにごしていたが、偽装されていたことから、裁判官の目には、当時管理がいかにデタラメなものであったかが返ってよく映ったことだろう。

この日原告団は、午前十時半港クラブ前に集合。「大災害の責任を追及する〝現場検証〟ごくろうさま」の横断幕をかかげ、一行を出迎え、公正な検証が行なわれるよう見守り、同時に原告側弁護団を拍手で送りました。本当なら私たちも同行して、爆発当時の状況や会社の保安サボの実態について一人ひとりが裁判官に証言したかったのですが、会社施設内ということで実現できませんでした。

弁護団の努力により、検証が原告側に有利な方向で終り、裁判闘争もいよいよ本格的立証段階に入ります。会社側の巻き返しもいままで以上に激しく、悪質になってくることが予想されるとき、勝利に向ってさらに団結と闘いを強化することが迫られています。

（この項小川記）

原告団――裁判講演会で団結誓う

七日夜労働会館で開かれました大災害裁判講演会で、藤本正弁護士が弁護団を代表して基調講演。同時にかけつけられた角銅立身・本多俊之・小島肇各弁護士からも三池に対する暖い連帯のあいさつがありました。

この夜は、CO患者とその家族に多数の遺族が集まり、労働会館ホールもぎっしりつまりました。

そして弁護団の各弁護士の暖いはげましに、いよいよ本格的なたたかいに突入してゆく三池大災害裁判を、いっそう団結を固めてたたかい抜くことを誓い合いました。

なお、藤本弁護士のこの夜の基調講演の内容（要旨）は別に紹介いたします。

参加した仲間の決意

抗議大集会には、各地から働く仲間がかけつけてくれましたが、次にそれらの仲間の手記を紹介します。

三化労組　早川哲

今年、三池大災害十二周年抗議大集会を迎えた。空高く黒煙をふきあげ仲間の生命を奪い去ったあの日を、忘れることはできない。

私はその日、剣道の練習をして夕食をたべ、ひと息ついたところであった。八百屋の友人が、三川鉱で事故が起こり、まだ沖さんが坑内から上ってきていない、と真青な顔で知らせにきてくれた。

さっそく出かけていって、三川鉱と三井天領病院との間をいったり来たりしながら、沖さんや他の友達をさがして歩いた。

天領病院では、ドアーを開けて死体置き場にまで入っていった。

何体かの遺体が、そこに折り重なっていた。友人達を見つけようとして入ったのだが、それを見た瞬間、部屋の中から飛び出した。そのまま部屋の中にいることができなかったのである。

折り重なった死体は、炭じんをかぶり真黒だった。

手は虚空をつかみ、目、鼻、耳には炭じんがつまっていた。形相が、爆発の恐ろしかったことを訴えていた。労働者の命を、虫ケラとも思わない資本の本質を、そこに見る思いだった。

遺族の告訴も、四百五十八名の尊い労働者の命を奪いながら、三井鉱山は国家権力（直接には検察権力）と組んで「無罪」となった。

私は毎年催される一一・九集会に参加して来たが、毎回新たな感動を経験し、そして明日からのたたかいの意欲をつくり出して来た。きっと、三池の労働者のねばり強いたたかいがそうしてくれるのだろう。

森永ミルク中毒の子供を守る会　山田ノエ

三池大災害抗議大集会に、〝森永ミルク中毒の子供を守る会〟の一会員として参加しました。

諸先生方の決意表明についてCO患者の手記を朗読されました。今にも、苦しい声が聞こえるようでした。

坑道の奥底で尊いお命が奪われた方。今なお一酸化炭素中毒で苦しんでいられる方。

それら患者の方達のご家族や、ご遺族の十二年間もの生活。

三井に向けてのたたかいで、ずいぶんご苦労されてこられたことと思います。せめて皆さま方が大災害裁判で勝利されることを、心から願わずにはいられません。

私達の守る会も、森永とずい分話し合ってきました。でも、死亡された遺族にはなんの保障もありません。皆さんと共にたたかわなければならないことを、大集会の場で改めて感じました。

災害のない、住みよい街づくりのために、共に団結を強めて頑張って行きたいと思います。

×

山田さんは〝森永ミルク中毒の子供を守る会〟の一会員としてがんばっておられる方で、お住まいは大牟田市大字橘九八です。

今年も参加したが、壇上で朗読されたCO患者早川静雄さんの手記、弁護団報告の力強さに心をゆすぶられ、資本に対する新たな怒りが燃えて来た。

×

早川さんは三井東庄化学の青年労働者で、活動家です。お住まいは大牟田市汐屋町です。